

ハルモニの遺したもの

ハルモニの告白を三浦綾子と共に⁽¹⁾考える

金 大勲

1. はじめに

何かを信じながら世の中を生き延び、そして、生き延びた自分の歴史を振り返る際に、何かを信じたというその事実に基づいて、自らの歴史をどのように語るのか。この疑問が筆者のなかに浮かび上がったのは、筆者の祖母(韓国語でハルモニ)に会った日である。

筆者は2018年8月8日、韓国の老人ホームに暮らすハルモニを訪ねた。当初は済州4・3事件⁽²⁾について訊くのが目的であった。しかしながら、その日、ハルモニを通して済州4・3事件以外の話に出会った。ハルモニは初めて筆者に次のことを語った。

ハルモニは「愚かだ、愚かだった。知らなかったから、知らなかったからしたよ。罪をたくさん犯した。でも、悔い改めた」と語り、続けて「学校で拝んだこと、昔祭^{チェ}祀をしたことも全部悔い改めた」⁽³⁾とふと告白した。

まず、ここで登場する「学校で拝んだこと」とは、日本の植民地支配下の小学校で行われた「宮城遙拝」を示す。ハルモニが「東を向いて拝んだこと」⁽⁴⁾と表現する「宮城遙拝」は、朝鮮人に対する「皇民化政策」⁽⁵⁾の一つである。しかしながら、当時小

学校に通った学生ならば、誰も避けて通れなかったその経験について、ハルモニは「愚かだ、愚かだった」、「悔い改めた」と語り、自分が経験した出来事を振り返った。

次に登場する「祭祀をしたこと」とは、キリスト教の家庭で生まれ育ちながらも、何十年も経てから「祭祀を売る」⁽⁶⁾という決断が行われるまでの間、キリスト教信者として先祖の位牌の前で拝んだ行為を示す。先祖の位牌の前で拝んだ行為は、ハルモニの告白の中でハルモニが経験した「宮城遙拝」と重なりながら浮かび上がった。

小学校と家という異なる場所で行われた「宮城遙拝」や「祭祀」には、歴史を振り返るハルモニにとっては何かに向かって「自分の体を動かす行為」という共通点を持っている。そして、それらの行為について、ハルモニは「やられた」、「仕方がなかった」と語るのではなく、むしろ、「愚かだった」、「悔い改めた」と語った。それは、それらの経験を自分の問題として受け入れ、乗り越えようとした姿が言葉として現れたのではないのかと考える。

それだけではなく、ハルモニの告白から分かるように、「宮城遙拝」や「祭祀」に関わる経験を「罪」として認識したため、過去の出来事を「悔い改める」対象として

扱っている。それは、それらの行為をキリスト教信者にとっての「罪」として認識させる信仰というものが、ハルモニの告白の奥底に存在するからである。つまり、歴史を振り返る際に、信仰というものが存在すること、そして、その信仰が歴史に入ってきた瞬間が、ハルモニの告白であると言えるだろう⁽⁷⁾。

このように、ハルモニの告白には信仰が存在することを踏まえて、ここで筆者は、ハルモニを中心にキリスト教信者が歴史を振り返る際に、その信仰の根底には具体的に何が存在しているのかを考えたい。そして、その問いに対してハルモニのようにキリスト教信者である三浦綾子⁽⁸⁾の文章を手掛かりとして考えてみたい。

三浦綾子は「わたしは、文学を至上とするのではなく、神を至上とする以上、信者として自分が日本に於て今しなければならぬことは、キリスト教を伝えることであると思っている」⁽⁹⁾と書いた。ここで、三浦の「今しなければならぬこと」という文章から伝わるある種の緊迫感は、彼女がキリスト教信者であるからであり、そこには、このように考えさせる信仰が存在し、その信仰が彼女に「キリスト教を伝える」ために「書く」という具体的な行為を生み出したと考える。同様に、キリスト教信者であるハルモニの場合は、信仰が過去の出来事について「語る」という具体的な行為を生み出した。

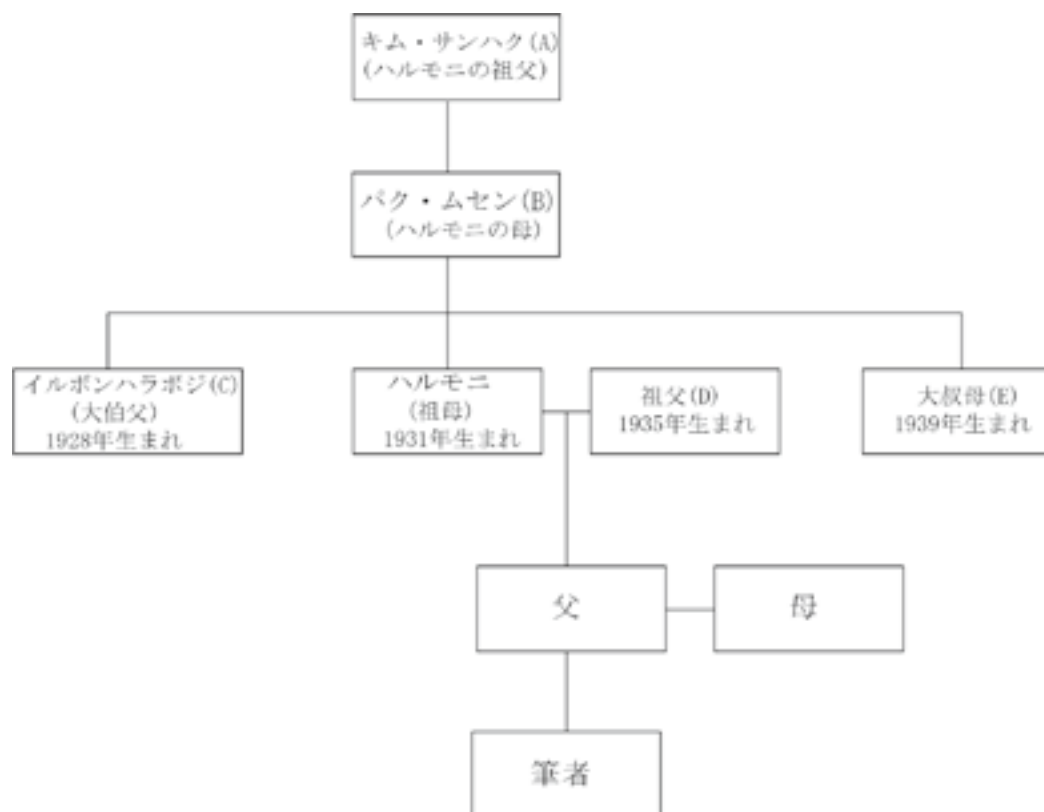
この事実を踏まえて、本稿では、まず、ハルモニへの聞き取りの中で頻繁に聴いた言葉である「天国」について考える。キリ

スト教信者として生きてきたハルモニが、90歳となり、死ということに近づいてきたから「天国」という言葉を語ったと筆者は当初考えていた。むろん、そのような理由がないとは思わないが、しかしながら、その事実よりさらに重要なことは、「天国」を構成する要素なのではないかと考える。後述するように「天国」という言葉からは、ハルモニにとって天国へ行くということが神様の計画に「選ばれていた」⁽¹⁰⁾ということであり、そして、その計画のなかには、われわれの存在は「偶発的存在」ではなく、むしろ「必然的存在」であることが浮かび上がるからである。

次に、前に述べた「天国」、及び「選ばれていた」という言葉は、後述するように、三浦綾子が「真の生き方をしだいに知らされた」⁽¹¹⁾場所として表現した教会から生まれたものである。ハルモニへの聞き取りの中でハルモニは「母のお腹にいたときから神様を信じていた」⁽¹²⁾と筆者に言ったように、ハルモニは生まれる前から教会に通ったと認識している。そして、その教会に関わる行動には、その場所に行くために畏敬を込めて準備するハルモニの母であるパク・ムセン(図1-B)の姿がある。そして、その母から教会に「徹底的」に通うことを教えられたハルモニの記憶がある。それだけではなく、この記憶の土台には教会に通いながら学んできた「愛」という言葉があり、そこに、告白が語られた一つの原因が存在するのではないかと考える。

このように、ハルモニの告白を中心として、その告白と絡んでくる信仰の根底には

【図1 筆者から見る父方の家系図】



具体的に何があるのかを、キリスト教信者として「小説を書くことは信仰生活なのである」⁽¹³⁾と語る三浦綾子と共に、彼女の著書⁽¹⁴⁾を通して考える。

Ⅱ. 共有している信仰と歴史

三浦綾子は著書『母』のあとがきに、なぜ小林多喜二の母について本を書いたのか記している。三浦が書いたように、三浦自身は小林多喜二をよく知らないし、共産主義にも疎かったが、三浦の夫が次のように言ったことで彼女は書き始めた。

(三浦の夫が：引用者)「多喜二の母は受洗した人だそうだね」ぽつりと言ったその一言が大きかった。共産主義者の母親を書くのならむずかしいかもしれないが、キリスト信者となった人のことなら何とか書けるかもしれない。同じ信仰を持つ私と、生きる視点が同じである筈だからだ。⁽¹⁵⁾

キリスト教信者となった人なら同じ信仰を持っていること、そして、同じ信仰⁽¹⁶⁾を持つのであれば生きる視点が同じはずだと語る三浦綾子の確信を参照すれば、キリスト教信者なら同じ信仰だと言える、ある共有している信仰が存在している。そして、共有されている信仰には、単に個人の感情に従うことだけではなく、アメリカの神学者メイチェンが指摘するように「全ての

信仰は知的要素 (intellectual element) を伴う」⁽¹⁷⁾と考えられる。つまり、キリスト教信者の中には共有されている信仰があり、その信仰には知的要素が存在している。

例えば、前述のように、ハルモニの告白の場合は「やられた」、「仕方がなかった」と語るのではなく、ハルモニの表現を借りると「愚かだった」、「悔い改めた」と語ったが、そこには、知的要素、つまり、感情によって歴史と向き合うだけではなく、ある種の知識に基づいて歴史と向き合っていると考える。そして、その知的要素は、ハルモニが家と教会という場所を中心に人生を営む中で、学んだり悟ったりした過程において蓄積され、ハルモニの告白に大きな影響を与え、告白の瞬間を生み出したと考える。

その告白と共に、知的要素として蓄積された言葉として、ハルモニへの聞き取りの中でよく聞いた「天国」がある。その「天国」

はキリスト教信者にとって信仰を構成する重要な要素である。以下に「天国」という言葉について考えてみよう。

1. 天国

前に述べたように、ハルモニへの聞き取りの中で頻繁に聴いた言葉として「天国」がある。その「天国」という言葉を聞いたとき、キリスト教信者として生きてきたハルモニが、死ということに直面したこと、つまり、90歳になった自分の人生を表現したと思った。しかしながら、それだけではなく、「天国」に含まれている要素、つまり、死後に「天国に行く」という信仰が常に存在することが表れていると考える。それについて、ハルモニはある日に宣教のために訪ねた牧師を通して聴いた話を語った。その牧師は「イエスを信じなさい」と語り、それを聞いたハルモニは次のように話した。

イエスを信じて天国に行こうと。だから、(神様がわたしを：筆者)選ぶから信じたの。選ぶから。神様を信じようと(わたしが：筆者)選ばれていたから。この話を聞いて、従ってきたの。⁽¹⁸⁾

まず、ハルモニの言葉に「天国に行こう」という言葉があるが、その表現は単に天国という所に行くという意味を表すというより、むしろ、天国に「帰る」という意味を持っている。それについて、韓国の教会では天国という言葉の代わりに「本郷」という言葉を用いて讚美歌を歌うように、天国にはキリスト教信者にとって元の所に「帰る」という意味が含まれている。

そして、天国は三浦綾子の夫である三浦光世が「死んだら、罪を犯す心配もないし、天国に入らせて下さるという約束はあるし。それに、天国では、もう死ぬこともないんだからね」⁽¹⁹⁾と語ったように「約束」に基づいて語られる言葉である。

その約束に基づいた「天国」について、ハルモニは信じて行こうという意志を示したが、信じようとする行為自体が「選ばれていた」という約束に基づいて語られている。つまり、ハルモニにとって「天国」という言葉は、漠然とした未来を望む自分の感情を表すことではなく、「選ばれていた」という具体的な行動と共に、明らかに存在する場所に行くことを表している。

それに加えて、ここで語られる「天国」という存在には、キリスト教信者にとって神の前に立つという意味もある。それについて三浦綾子は次のように書いた。

聖なる神の前に、わたしたちは罪に汚れたまま、洗いもせずに出て行くことができるだろうか⁽²⁰⁾

三浦綾子は「神の前に」と書き、続けて「罪に汚れたまま」と書いたが、これは、三浦だけではなく、ハルモニが持った信仰にも存在し、だからこそ、ハルモニの告白において「悔い改めた」という言葉が発せられたのではないのかと考える。つまり、前に述べたように、ハルモニにとって「天国に行こう」というのは、「天国」という確かに存在する場所に行くことであり、それは「神の前に」立つという瞬間を伴うことである。だからこそ、三浦が書いたように「罪

に汚れたまま」ではいけないとハルモニは認識し、それがハルモニの告白が語られた原因であると考えることができる。

つまり、ハルモニも自分の歴史を振り返るときに、いつか「神の前に」立つ自分の様子を共に考えたのではないだろうか。だからこそ、ハルモニから「悔い改めた」という言葉が発せられたのではないだろうかと考える。

このように、ハルモニが語った「天国に行こう」という言葉が、ハルモニが信仰を持つ唯一の目的とは思わないが、重要な要素として存在したと考える。そして、死後に「神の前に」という信仰、そして、その信仰を持つハルモニだからこそ、「宮城遥拝」や「祭祀」という経験に触れた瞬間に、「悔い改めた」という告白が生み出された。

次に、先述の、天国と共に語られた「選ばれていた」という言葉について考える。そこで重要なのは、「選ばれていた」という言葉の底には、ハルモニの存在が「偶然的存在」ではなく、むしろ、「必然的存在」であることを示していることである。つまり、ハルモニにとって、人間は神様の計画によって生まれ育った存在であり、死は単にハルモニの命が「終わる」ことを示すだけではない。むしろ、上に述べたように、神様が存在する天国に「帰る」という意味があるからこそ、「必然的存在」と言えるのである。

そして、天国に帰るということは、三浦綾子が書いたようにキリスト教信者にとって「神の前に」立つこと、言い換えれば、イエス・キリストに会うことであり、その

事実を信じるハルモニだからこそ「悔い改めた」という言葉が含まれた告白が生み出されたと考える。

このように、信仰が歴史に入ってきたハルモニの告白は、その告白の根底に存在する「天国」という言葉と深く関わっており、そして、そこから、ハルモニはこの世における「必然的存在」なのかという問いが生まれる。その問いに対する答えはひとまず脇に置き、自らを「必然的存在」であると信じる人びとは、歴史をどのように認識し、その歴史をどのように描き直すのかという点について考えたい。

それは、ハルモニや家族に対する聞き取りから筆者が確かに感じたことや、三浦綾子の小説を通して感じたことに、歴史に対するかれらの捉え方が存在すると考えたからである。そして、捉え方においては、出来事を「必然的」に捉える視点が潜在しているのではないかと考える。

2. 選ばれていた——必然と歴史認識

三浦綾子が書いた『塩狩峠』の主人公である永野信夫が、咲いた花を見ながら必然という言葉について考える場面がある。そこで、彼は次のように語った。

この自分はいったいどこから来たんだろう。母から生まれたことはわかっている。だが、それを単に当然のように考えることはできなかった。(中略) 信夫は必然という言葉を思った。自分は必然的存在なのか、偶然的存在なのか。
(21)

ここで、三浦綾子は永野信夫を通して「自分は必然的存在なのか、偶然的存在なのか」という質問を引き出した。その質問に対して三浦は答えないまま、他の場面に移る。しかしながら、三浦綾子はこの文章を通して、われわれに何を伝えたかったのか。そして、われわれが「必然的存在なのか、偶然的存在なのか」という問いとわれわれが経験した出来事にはどのような関係があるだろうか。ここで筆者は、ハルモニが語った「選ばれていた」という言葉を、「必然」という言葉から考えようとする。

それについて、三浦綾子の自伝小説の一冊である『この土の器をも』に描かれている裁判所に勤務するMという友との経験が参考になる。Mは姓名判断に関心があり、三浦綾子の夫である三浦光世の名前を気に病み、ようやく三浦綾子に「ご主人のお名前は、変えられたらいかがでしょうか。この名前の持主は生涯病弱なのです」と勧めた人物である。実際に病弱だった三浦光世は彼に次のように言った。

しかし、仮に名前によって病弱であったとしても、病弱必ずしもマイナスばかりではなかったとも三浦(三浦光世：引用者)は言った。「Mさん、もし私が病気をしないで強健な体であったとしたら、私のような人間は、多分自分自身の力にだけ頼って、全能の神を信ずることが、できなかつたと思うんです」⁽²²⁾

三浦光世は「病気をしないで強健な体であったとしたら」、「全能の神を信ずると

いうことが、できなかつた」と語る。逆に言えば、病弱であったからこそ、全能の神を信ずることができたとも言えるだろう。つまり、キリスト教信者である三浦光世は、「全能の神を信ずる」に至るために、病弱であったという出来事を「マイナスばかりではなかつた」と捉え、むしろ、その出来事は「自分自身の力にだけ頼って」しまう自身にとって「必然的」過程であったと認識したのだ。

これに関して、ハルモニの告白について知るために、ハルモニの妹である大叔母(図1-E)への聞き取りした際のことを思い出す。筆者は大叔母に会ってハルモニから参拝の話を聞いたことを伝え、大叔母にハルモニから参拝の話を聞いたことがあるのか訊いてみた。そうすると、大叔母は「そのときは学生たちが毎日拝んだよ。ハルモニは日帝時代に学校に通ったんでしょ」と語り、そのあと、20秒ほどの長い沈黙が続いた。そして次のように語った。

確かに神様は、聖書にもこのような御言葉があるでしょう。大変なことがきたら喜ぶことにすると書かれているよね。しかし、大変なことがきたとき、何が喜ばしい？喜ばしいより悲しい。ところが、そのあときっといいことが生じてくる。われわれの母(パク・ムセンを示す：筆者)も子ども⁽²³⁾が死んで、われわれの兄(イルボンハラボジ⁽²⁴⁾を示す：筆者)も危なくなつて、悲しくて大変なこと⁽²⁵⁾がきたが、これらを通してイエス様を信じることになったからね。だから、大変なことが

きたとしてもどれも悪いということはないよね。⁽²⁶⁾

大叔母が引用した「大変なことがきたら喜ぶことにする」ことは「さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい」という聖書の御言葉⁽²⁷⁾である。その御言葉は筆者も何回も聴いたことがあるが、しかしながら、その御言葉が大叔母にとって、ハルモニの参拝の話をきっかけに歴史を振り返るとき、大叔母が持っている信仰が御言葉を通して現れてきたのである。

それだけではなく、イルボンハラボジ(図1-C)が経験した出来事が決して悪いことではない、むしろ、キリスト教信者にとって「これらを通してイエス様を信じることになった」と語り、「イエス様を信じること」に至るために、導いてくれた「必然的」過程である出来事として認識している。そして、そこまで至るために、その出来事が「大変なことがきたとしても全部悪いことではない」と受け入れている。

このように、三浦光世や大叔母の話を通して、キリスト教信者が過去の出来事を「信じる」として極めて自然に結び付けながら、各自の出来事を「必然的」過程に置いて眺めていることが分かった。そして、過去の出来事を「必然的」過程に置いて眺めていることについては、次の文章が参考になるだろう。

どんな嘘つきでも、非行的な性格でも、盗癖があっても、残忍でも、親不孝でも、冷酷でも、神にとっては捨つべき

存在はない。どのような失意ですら、それは神の愛のためにそなえられたものであるとも言う。⁽²⁸⁾

ここで、三浦綾子は様々な事柄について「神の愛のためにそなえられたものである」と書いている。これは、前に述べたように、三浦光世の名前に関わる出来事、そして、イルボンハラボジに関わる出来事は「全能の神を信ずること」という目的のために、「そなえられたもの」として眺めるという根本的な視点が潜在している。

これを踏まえて、ハルモニの告白を考える際に、特に、ハルモニの告白の底に存在する信仰について考える際に、自分の信仰に基づいて「選ばれていた」と語るハルモニからこそ、自分の過去の出来事を「愚かだった」「悔い改めた」という言葉を出したのであり、そこにはその出来事を「そなえられたもの」として眺める視点が存在すると考える。

このように、「そなえられたもの」を眺める視点を考える際、三浦綾子の小説『続氷点』の「解説」が思い浮かぶ。

「されど罪の増すところには恩恵(めぐみ)も弥(いや)増(ま)せり」という聖書のことばの示すとおり、キリスト教的理解に従えば、罪の意識は、ゆるしや再生と紙一重、というより、すべてに恵みそのものであるとさえ言える。だから、罪が描かれているその背後には、絶望や挫折が、じつは恵みそのものだという世界が、たとえば一つ

の光芒のようにあらわされていなければならない。⁽²⁹⁾

ハルモニから「宮城遥拝」や「祭祀」の経験聞いた瞬間、確かに、筆者は罪という言葉と共に何らかの悲しみを感じたのである。しかしながら、告白に現れたその悲しみは、絶望や挫折から出発したものではなく、むしろ、「一つの光芒」から出発したものであり、そこには、「そなえられたもの」を「じつは恵みそのものだ」と考えるような信仰が共にあったと考える。

最初に出した問いに戻るが、三浦綾子は「自分は必然的存在なのか、偶然的存在なのか」という文章を書いた。もしかすると、彼女はその文章を通してわれわれが「必然的」存在であると語りたかったかもしれない。そして、その質問の答えには、過去の出来事を「そなえられたもの」として眺めているハルモニや他のキリスト教信者の視点が存在していると考ええる。

このように、過去の出来事を「そなえられたもの」として眺めているハルモニや他のキリスト教信者にとって、三浦綾子が「真の生き方をしだいに知らされた」と表現した教会という場所が存在している。その教会について考えてみよう。

Ⅲ. 教会

上に述べたように、三浦綾子は「真の生き方をしだいに知らされた」場所として教会を指した。むろん、キリスト教信者である三浦だからこそ、教会をこのような場所として取り上げたと考えられる。しかしな

がら、実際に、三浦だけでなく、ハルモニを中心に聞き取りを進める作業のなかで、教会という場所が「真の生き方」をハルモニの家族に教えてきたのだと考えるようになった。それは、単に大きな影響を与えたというより、彼らの人生は教会を抜きにしては成り立たないこと、つまり、「教会は、キリストの体と言われる」⁽³⁰⁾ 場所であることを改めて聞き取りの中で感じ取ったからである。

これを踏まえて、教会について考える際に、筆者の母が語ってくれたパク・ムセン(ハルモニの母)に関わる話が想起される。その短い話を通して、教会に対するキリスト教信者が持つ態度を垣間見ることができると考える。

1. 白い韓服^{ハンボク}——生き方を考える

母が結婚する前に、週末は父の故郷である^{グイドク}帰徳という町に父と共に通った。そして、日曜日には帰徳に住んでいたパク・ムセン(ハルモニの母)やハルモニと共に教会に行く。幼い時から教会に通った母にとって日曜日に教会に行くのは当然のことであり、楽しみであったので、父の家族と共に喜んで教会に行った。その話の中で、母が筆者に語ったのは、パク・ムセンが教会に行く準備をする姿であった。そして、その姿が非常に印象的だったと言う。⁽³¹⁾

日曜日の朝、パク・ムセンは早く起き、教会に行くためにきれいにアイロンをかけた白い韓服を出して着る。そして、白いひもを頭に巻きながら、髪を整える。最後に、既に外に置かれた真っ白なゴム靴をはい

て、教会に出かけるということであった。

その姿を母はそばで眺め、今でも感動したように語ってくれた。それは、当時パク・ムセンが80歳を過ぎた高齢者であったこと、そして、帰徳という所が相当に田舎であり、毎日続けるべき畑の仕事があったという事実を母はよく知っていたからである。つまり、忙しい日々の中、教会に行くこと自体がパク・ムセンにとって精一杯なはずなのに、毎日曜日、相変わらず教会に行くために、既に白い韓服や白いゴム靴を真剣に準備して着るということが、母の記憶に印象的に残ったのである。

しかしながら、それだけではなく、実に母が筆者に語りたかったのは、教会に行くために真剣に準備するパク・ムセンの姿から表れたこと、つまり、白い韓服や白いゴム靴に染み込んでいるその態度ではないかと考える。それは、教会に行くということが、パク・ムセンにとってある種の儀式であり、そこには、教会に対する彼女の態度が表れたのである。正確にいうと、その態度ということに神様に対する「畏敬」が、パク・ムセンの姿から現れ、母に伝わったのだと考える。その態度について考えるために、三浦綾子が教会について書いた文章が参考になる。

教会は、単に信仰を学ぶための学校ではない。神を礼拝し、神と人とが交わり、人と人とが交わり、そして、ここで聖書の言葉を聞き、力を与えられ、その与えられた力で生きるべく、各々の生活の場に向って行くところでもある。教会は、キリストの体と言われる

わけがそこにあるのである。⁽³²⁾

教会が「人と人とが交わり」をするだけでなく、「神を礼拝し、神と人とが交わり」をする場所であると書いてある。そして、「神を礼拝し、神と人とが交わり」をすることは、神と人が関係を構築していくことである。したがって、教会に行く前から準備したパク・ムセンの白い韓服や白いゴム靴は、神と人が関係を構築していく人間の態度を示しており、そこから「畏敬」が現れ、パク・ムセンの周りにいた人びとに染み渡ったと考える。

そして、また教会は「その与えられた力で生きるべく、各々の生活の場に向って行くところ」と記されているように、キリスト教信者にとって教会は「生活の場」につながる場所として存在している。それについて、パク・ムセンと共に教会に通ったハルモニや大叔母への聞き取りから、教会について語られた「徹底的」という言葉が参考になる。

ハルモニと大叔母が記憶しているように、教会に行く日である日曜日には「畑も行かずに徹底的に教会に行った」⁽³³⁾のである。小さな町では、教会に行く行為自体が目立つことであった時期に、「徹底的に教会に行った」ことは、キリスト教信者というラベルが貼り付けられることでもある。当時キリスト教は西洋の宗教としてさげすまれた⁽³⁴⁾という事実があるにもかかわらず、このような事情を踏まえて「徹底的」に教会に行ったと明らかに語るように、別の道はもう存在していないと考える強い意志が感知できる。

そして、日曜日には「徹底的に教会に行った」ということは、単に「日曜日に教会へまじめに通う」という意味よりも、「日曜日を特別な日として守る」という意味を帯びる。それは、神様に礼拝を捧げる教会を中心に置いて世界を眺めることであり、そこには、キリスト教信者と非キリスト教信者という境界線が引かれ、その事実を日曜日に再確認する。また、日常生活を営む信者にとって、この世の中で自分の人生をどのように生きるべきかという、前述したように「真の生き方をしだいに知らされた」場所としても教会は存在したのである。

このように、白い韓服に染み込んでいるパク・ムセンの姿、換言すれば、神様に礼拝を捧げる教会に対する畏敬を表すパク・ムセンの姿を眺めるハルモニがいた。そして、その姿を眺めたハルモニは「徹底的」に教会に通ったと語り、その記憶に即して過去の経験について「愚かだった」、「悔い改めた」と告白したハルモニが存在している。

このように、かれらが生きてきた痕跡を書いていると、筆者が『同志社グローバルスタディーズ』11号に投稿し、その投稿に対していただいた査読結果報告書を思い出す。その査読結果報告書には次のようなコメントが書かれていた。「ハルモニの語りを通して「歴史」や「信仰」について考えようとした、これまでの歴史叙述の在り方を根本から問い直すような問題提起の可能性のある、たいへん意欲的で挑戦的な論考である」と指摘されていた。しかしながら、筆者はハルモニの告白を中心として、ハル

モニの「生き方」について「生活の場」から考え、筆者自身の考えと共に書いただけであって、特に歴史叙述に挑戦しようとした意図はなかった。

これに関して、三浦綾子の小説『氷点』について朝日新聞の文芸時評で江藤淳氏が評した内容と、そしてその内容についての三浦綾子の考えが参考になるだろう。

私(三浦綾子を示す:筆者)の小説「氷点」に文壇への挑戦を感じた⁽³⁵⁾と書かれてあった。私自身、それほどの気負いもなかったように思うけれど、結果としてそのような評をいただいたということに私は、クリスチャンの生き方は、文学であれ絵画であれ、また日常生活であれ、この世的なものに挑んでいるのだということを、改めて思い知らされた。⁽³⁶⁾

確かに、三浦が書いたようにキリスト教信者だからといって特別に挑戦的な日々を送るわけではない。そのように思いながらも、ここに書かれた「クリスチャンの生き方」には、もしかするとその根本に「挑戦」と思わせる身振りが存在するのではないかと考える。例えば、パク・ムセンは自分の子どもを生かすために、教会に通い始めた。同時に、長男の嫁であったので、長い間慣習として続いてきた祭祀⁽³⁷⁾を守らなければならなかった。そして、実際に親戚との葛藤が生み出された。このような状況にもかかわらず、パク・ムセンが信仰を守ることができたのは「命」という経験と、その経験に基づいて作られた「生き方」が存在

するからであると考える。

13歳の三浦綾子が自分の妹の死を経験して「死というものを観念ではなく事実として知った。死の冷酷無情さは、その後のわたしの生き方に大きな変化をもたらしている」⁽³⁸⁾と書いたように、パク・ムセンは自分の長女の死に直面し、そこで「死の冷酷無情さ」を経験したのである。そして、また病気で死んでいく息子を生かすために、今まで生きてきた「わたしの生き方」を変化させ、後にその「生き方」は前述した「祭祀を売る」という行動につながる。そして、「祭祀を売る」という行動は、祭祀をするのが当たり前と思われる社会の構造に対する「挑戦」とも考えられる。

このように、「挑戦」と考えられる根本には「命」に基づいて作られた「生き方」が存在しており、その生き方はそのまま止まらずに、少しずつ変わりながら「証」として既存の構造と衝突したのである。

2. 愛

三浦綾子の「真の生き方をしだいに知らされた」教会という認識を通して、ハルモニはキリスト教信者が共有している「愛」を経験し、その「愛」の経験があるからこそ、告白が語られたのではないかと考える。

まず、その「愛」について三浦綾子の『塩狩峠』を通して検討することができる。この小説では、路上にキリスト教の伝道師が登場する場面があるが、この人物は次のように語る。

愛とは、自分の最も大事なものを人に

やってしまうことでもあります。最も大事なものとは何でありますか。それは命ではありませんか。このイエス・キリストは、自分の命を吾々に下さったのであります。⁽³⁹⁾

叫ばれたこの言葉の中で「命を吾々に下さった」があるが、それを信じるハルモニにとって、その「命を吾々に下さった」イエス・キリストに対して感謝という気持ちがあるにもかかわらず、別の対象を拝んでしまった自分の姿を見つけたという事実が、ハルモニの告白が語られた心の奥底に潜んでいると考える。

これを踏まえて、ハルモニの告白に登場する「罪をたくさん犯した」ことについて考えると、それは、上に述べたように、神様の「愛」があるからこそ、「罪をたくさん犯した」と語られたことであるだろう。そして、これは、神様の「愛」を覚えているからこそ、告白というのはハルモニにとって歴史を振り返るとき、罪の問題に直面したことに対する「反応」とあると考える。

その「反応」について、三浦綾子が氷点を書きながら考えたことが、手掛かりとして考えられる。

(氷点を：引用者)書きながら、人間の社会はなぜこんなにも幸福になりにくいのか、一体その原因は何かと考える時、やはり教会で教えられている罪の問題に、つき当たらずにはいられなかった。この、罪の問題を、クリスチャンとして訴えねばならぬと思った。「訴

えねばならぬ」というこの使命感がなければ、わたしはあのまま書き通すことはできなかつたにちがいない。⁽⁴⁰⁾

ここで、三浦綾子は「罪の問題を、クリスチャンとして訴えねばならぬ」と記したが、キリスト教信者として「罪の問題」に直面したとき、その問題を「訴えねばならぬ」と受け取っている。

これについて考えるとき、ハルモニへの聞き取りが浮かび上がる。筆者が2019年6月6日にハルモニに会ったときに、「東を向いて拝んだことが間違っただことであるといつ気づいたんですか？」と聞いたことがある。その質問についてハルモニは次のように答えた。

(東を向いて拝んだことが:筆者)間違っただこと。信仰がよくなるから分かってきたよ。間違っただこと。⁽⁴¹⁾

ここに出てくる「信仰がよくなる」ことの背景には、聖書を読んだり、牧師の説教を聴いたり、讃美歌を歌ったりした行為があり、その中で罪という問題に触れ、その結果、ハルモニは過去の出来事を「間違っただこと」として認識したと考える。

そして、ここで宮城遥拝を「間違っただこと」として認識しながら、三浦綾子が「罪の問題を、クリスチャンとして訴えねばならぬ」と語ったように、過去の出来事に関わる経験をハルモニは「間違っただこと」として受け取り、それを「語らなければならぬ」と気づいたことで、それを思わずふと告白したのではないかと考える。

つまり、その経験を単に頭の中に置いておかず、自分の口から出したのは、キリスト教信者であるハルモニにとって、「間違っただこと」と表現された、告白を導く要因として「罪の問題」が存在している。そして、そこには、「命を吾々に下さった」という神様による「愛」が、ハルモニの中にあると考えることができる。

このように「クリスチャンとして訴えねばならぬ」、「語らなければならぬ」という具体的な行動には、「罪の問題」が存在する。そして、繰り返しになるが、その「罪の問題」の底には「命を吾々に下さった」と表現される「愛」が存在する。そして、その「愛」がハルモニの過去の出来事を「告白」するように導いたのではないだろうかと考える。

このように、「愛」や「罪の問題」は密接な関係を結び、ハルモニの告白において重要な要素となっている。そして、そこには、キリスト教信者であるハルモニにおいて、歴史を眺める視点が潜んでいると考える。

IV. おわりに

上に述べたように、1930年代にイルボンハラボジに関わる経験を通してハルモニの家に入ってきたキリスト教は、現在に至るまで90年間続いてきた。そして、そこには、植民地支配、皇民化政策による宮城遥拝、そして、祭祀に関わる経験という歴史的事実が刻まれている。そして、この事実がキリスト教信者として生き延びたハルモニの告白を通してよみがえってきた。

そして、この事実を、ハルモニが「ふと」告白したのは、何かを感じたからであろう。そして、何かを感じたのは、何かを見たのではないだろうか。そして、それをハルモニと共にいた筆者に「告白」として聞こえたのは、筆者もまた、何かを感じたからであろう。

これについて、筆者が韓国の老人ホームに暮らすハルモニを訪ねた日に戻って考えたい。ハルモニを訪ねた理由は、前に述べたように、済州4・3事件について訊くためであった。しかしながら、その日、死に覆われた⁽⁴²⁾ 済州4・3事件に関わる経験より、宮城遥拝や祭祀に関わる経験、そして、その経験を語るハルモニの悲しみを感じた。そして、そこには、現実的な死より霊的な死を危惧するハルモニの姿が見えたのである。これについて、三浦綾子はこのように書いている。

死に直面していた私にとって、ほんとうに病気が治ることよりも、その信仰を与えられることが先決であった。病気は治っても、いつか死ぬ。みんな死ぬ。私は、ベッドの中で、いつもそう思っていた。私にとって重要なのは、今、確かな信仰を与えられたいということであった。⁽⁴³⁾

13年間肺結核や脊椎カリエスで闘病生活を送った三浦綾子が「ほんとうに病気が治ることよりも」、「私にとって重要なのは、今、確かな信仰を与えられたいということ」と書いている。これに即してハルモニの告白を考えると、ハルモニにとって済州4・3

事件より、信仰の問題を重要な問題として眺めていたと考える。そして、告白とは、実際に経験した過去の出来事にかかわる信仰の問題を、見えないが存在する神様に預けた証拠でもあると考える。

筆者は、その出来事に出会い、続けてハルモニへの聞き取りを進める中で聞いた様々な言葉、即ち「天国」、「選ばれていた」、「徹底的」、「間違ったこと」に触れ、その言葉の底に存在する意味を三浦綾子と共に考えようとした。そして、この言葉に重なりながら現れたハルモニの告白は、その告白を通して日本帝国を批判することではなく、あるいは、救済を求めることでもなく、むしろ、1931年にキリスト教の家庭で生まれ育ったハルモニの「信仰」の存在を表したのである。

このように、これまで通史と呼ばれてきた歴史には書かれていない、ハルモニの歴史について書いた。通史であれば、例えば、ハルモニは日本帝国による皇民化政策の一つである「宮城遥拝」を経験したが、それは当時小学校に通った学生であれば誰も回避できなかった、という歴史を見せてくれる。しかしながら、ハルモニから見る歴史は、「宮城遥拝」を経験が、信仰に基づいた告白を通して語られ、現在に至るまで宿っている⁽⁴⁴⁾ と、筆者に教えてくれたのである。

そして、ハルモニの告白は、ハルモニが皇民化政策の一つである「宮城遥拝」を経験したと語ってくれる通史を否定するのではなく、むしろ、ハルモニの歴史と共に、通史を完成する手段として存在しているこ

とを強調しておきたい。

註

- (1) 三浦綾子がキリスト教信者であるからこそ書けることがあったように、ハルモニがキリスト教信者であるからこそ告白ができたということに着目し、両者の持つキリスト教信者の信仰の話結び付けることが可能であると考えた。この事実を踏まえて、わたしにとって三浦綾子の文章を読むことは、ハルモニとの聞き取りのなかであらわれた信仰についての言葉を見つける作業である。つまり、わたしにとって三浦綾子は作家として研究する対象ではないし、むしろ、わたしの味方として一緒に道を歩きながら話し合う人である。それをわたしは「共に」と表現したのである。
- (2) 1947年3月1日を起点とし、1948年4月3日に発生した騒擾事態及び1954年9月21日まで済州道で発生した武力衝突と鎮圧過程において住民が犠牲になった事件をいう。済州4・3事件真相究明及び犠牲者名誉回復委員会『済州4・3事件真相調査報告書<日本語版>』（済州4・3平和財団,2014）。
- (3) ハルモニへの聞き取り（2018年8月8日 韓国鎮安郡バンウォルノインサランの家（老人ホーム）にて実施）。
- (4) ハルモニへの聞き取り（2019年6月6日 韓国鎮安郡バンウォルノインサランの家（老人ホーム）にて実施）。
- (5) 宮田節子の説明によれば、一般に朝鮮人を「皇国臣民」化するための、様々な政策の総称と理解されている。つまり、神社参拝、宮城遥拝、国旗掲揚、「皇国臣民誓詞」の斉唱、君が代の普及、日本語普及、志願兵制度の実施、第三次教育令の改正、創氏改名等々である。宮田節子「皇民化政策の構造」朝鮮史研究会『朝鮮史研究会論文集』29(1991),44。
- (6) パク・ムセンはイルボンハラボジのこと（Ⅱ．共有している信仰と歴史を参照）を通してキリスト教を受け入れたが、彼女が信じたそのキリスト教は祖先祭祀を偶像崇拜として認識して禁止した。そのために、長男の嫁であったパク・ムセンは信仰を守るために、何十年も経てから、お金を払って自分が持つ祖先祭祀の義務を放棄し、他の親戚にその義務を移したという出来事である。
- (7) 本稿は『同志社グローバル・スタディーズ』で

考えた問題に連なる論考である。『同志社グローバル・スタディーズ』では、ハルモニの告白から信仰が歴史に入ってきたことについて考えた。（同志社グローバル・スタディーズ学会『同志社グローバル・スタディーズ』11(2020),77～100参照）。本稿では三浦綾子の文章を手がかりに信仰の根底には具体的に何が存在しているのかを考察している。

- (8) 三浦綾子は、1922年に北海道旭川市で五番目の子（次女）として生まれた。1939年から1946年3月まで小学校の教員として働いたが、「墨塗り教科書」などで教育に絶望し、小学校を退職する。同年6月に肺浸潤が発見され、療養所に入り、これから13年間に及ぶ闘病生活が始まる。闘病中にキリスト教に出会い、1952年に洗礼を受ける。1959年に三浦光世と結婚し、1961年に雑貨店を開く。1964年に朝日新聞一千万円懸賞小説に『氷点』が入選し、作家活動が始まる。その後『塩狩峠』『道ありき』『母』『銃口』など数多く小説・エッセイ等を発表する。1999年10月に逝去。（黒古一夫『三浦綾子論』（柏艚舎,2009),273～278参照）
- (9) 三浦綾子『遺された言葉』（講談社,2003),117。
- (10) 少し説明を加えると「選ばれていた」ということは、神様によってハルモニが「既に選ばれた」という意味が込められていることを示す表現である。ハルモニへの聞き取り（2019年6月6日 韓国鎮安郡バンウォルノインサランの家（老人ホーム）にて実施）。
- (11) 三浦綾子『ひかりと愛といのち』（岩波書店,1998),83。
- (12) ハルモニへの聞き取り（2018年8月8日 韓国鎮安郡バンウォルノインサランの家（老人ホーム）にて実施）。
- (13) 三浦綾子『遺された言葉』116。
- (14) 三浦綾子の著書、あるいは三浦綾子の著書を読むことは、筆者にとって三浦綾子を分析することではなく、彼女の文章を通して筆者の考え、あるいは研究テーマを表現することである。つまり、彼女の著書は手段であり、目的ではないのである。
- (15) 三浦綾子『母』（角川書店,1992),206。
- (16) 同じ信仰であると言っても、それが同じプロテスタント教団の中にも激しい対立は存在する。実際、韓国の長老会統合教団においてもミョンソン教会の父子世襲（2019年）について激しい対立があっ

- た。しかしながら、対立の原因は信仰が異なるというより、この信仰を持つ人間による対立が原因として考えられる。さらに言うと、信仰の基になる「イエス様によって救われた」、「天国は存在する」ことから対立が発生するというよりは、三浦綾子の『氷点』が取り扱った「人間の原罪」という問題を背負って生きていく人間によって激しい対立が発生すると思われる。
- (17) Stephen J. Nichols, *J. Gresham Machen: A Guided Tour of His Life and Thought*, 105.
- (18) ハルモニへの聞き取り (2019年6月6日 韓国鎮安郡バンウォルノインサランの家(老人ホーム)にて実施).
- (19) 三浦綾子『光あるうちに』(新潮文庫,1982),82.
- (20) Ibid.,160.
- (21) 三浦綾子『塩狩峠』(新潮文庫,1973),220.
- (22) 三浦綾子『この土の器をも』(新潮文庫,1981),91.
- (23) パク・ムセンが最初に産んだ娘を示す。その娘は理由も分からず生後3か月に亡くなった。
- (24) 1928年に生まれ、済州島にある中学校を卒業してから日本へ渡った人物である。「イルボンハラボジ」とは韓国語で「日本のおじいさん」を意味し、家の中にはこのように呼ばれた。
- (25) ここで書かれた「悲しくて大変なこと」は、イルボンハラボジが幼い時に病気で死にそうになった状態を示している。そして、その中には、その後イルボンハラボジを生かすためにパク・ムセンが教会に通い始め、教会に通い始めると息子の病気が治ったという歴史が存在している。
- (26) 大叔母への聞き取り (2019年5月24日, 韓国済州市済州永楽教会1階カフェにて実施).
- (27) 筆者の大叔母が引用した聖書の御言葉は「私の兄弟たち。さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい」(『ヤコブの手紙1:2』新改訳)である。
- (28) 三浦『光あるうちに』,250 - 251
- (29) 黒古一夫『三浦綾子論』(柏艚舎,2009),27.
- (30) 三浦『光あるうちに』,194.
- (31) 母への聞き取り (2019年5月31日, 韓国済州市筆者の家にて実施).
- (32) 三浦『光あるうちに』,194.
- (33) 大叔母への聞き取り (2019年5月24日 韓国済州市済州永楽教会1階カフェにて実施).
- (34) 조남수 『조남수목사회고록』 선경도서출판사, 1987년, 72쪽 (趙南洙『趙南洙牧師回顧録』(善瓊図書出版社,1987),72).
- (35) ここで、江藤淳が「文壇への挑戦を感じた」と書いたことについて二つの理由が考えられる。まず、自分(辻口啓造を示す)を「純粹」「無垢」等々としてその正しさを主張しようとする自己主張の文学とは正反対の発想から生まれた発見であること、次は今日の週刊誌小説が大てい被害者の怨恨を動機とする社会の裏面の暴露で能事足れりとしているなかで、『氷点』がひがみを否定する視点を提供していることである。
- (36) 三浦綾子『信仰と文学』(日本キリスト教団出版局,2009),45 - 46.
- (37) 祭祀は偶像崇拜として認識され、キリスト教では禁止したのである。
- (38) 三浦『光あるうちに』,45
- (39) 三浦『塩狩峠』,318.
- (40) 三浦『この土の器をも』,244.
- (41) ハルモニへの聞き取り (2019年6月6日 韓国鎮安郡バンウォルノインサランの家(老人ホーム)にて実施).
- (42) このように表現したのは、1948年当時の人口が281,000人の中で「済州4・3事件による人命被害は25,000～30,000人と推定される」ことに基づいて筆者が書いたのである。済州4・3事件真相究明及び犠牲者名誉回復委員会『済州4・3事件真相調査報告書<日本語版>』,377.
- (43) 三浦綾子『一日の苦労は、その日だけで十分です』(小学館,2018),205.
- (44) ここで「宿っている」ということは「私はあなたの純粹な信仰を思い起こしています。そのような信仰は、最初あなたの祖母ロイスと、あなたの母ユニケのうちに宿ったものですが、それがあなたのうちにも宿っていることを、私は確信しています」(『テモテへの第二の手紙1:5』新改訳)という御言葉から引用したことである。この御言葉は、使徒パウロが彼の弟子であるテモテに書いたことで、そこで重要なのは、祖母ロイスや母ユニケにある信仰がテモテに引き継がれ、その信仰に刻まれている痕跡がテモテのうちに「宿っている」と言えることである。